

殿さまの茶わん

小川未明

青空文庫

昔、ある国に有名な陶器師がありました。代々陶器を焼いて、その家の品といえば、遠い他国にまで名が響いていたのであります。代々の主人は、山から出る土を吟味いたしました。また、いい絵かきを雇いました。また、たくさんの職人を雇いました。花びんや、茶わんや、さらや、いろいろのものを造りました。旅人は、その国に入りますと、いずれも、この陶器店をたずねぬほどのものはなかつたのです。そして、さっそく、その店にまいりました。

「ああ、なんというりっぱなさらだろう。また、茶わんだろう……。」と行って、それを見て感嘆いたしました。

「これを土産に買っていこう。」と、旅人は、いずれも、花びんか、さらか、茶わんを買ってゆくのであります。そして、この店の陶器は、船に乗せられて他国へもゆきました。

ある日のことでございます。身分の高いお役人が、店頭にお見えになりました。お役人は主人を呼び出されて、陶器を子細に見られました。

「なるほど、上手に焼いてあるとみえて、いずれも軽く、しかも手際よく薄手にできて

いる。これならば、こちらに命令めいれいをしてもさしつかえあるまい。じつは、殿さまのご使し用ようあそばされる茶わんを、念ねんに念ねんを入れて造つくってもらいたい。それがために出向でむいたのだ。

「と、お役人やくにんは申もうされました。

陶器店とうきてんの主人しゅじんは、正直しょうじきな男おとこでありまして、恐れ入おそりました。

「できるだけ念ねんに念ねんを入れて造つくります。まことにこの上うへの名譽めいよはございませんしだいです。

「と、お礼れいを申もうしあげました。

役人やくにんは立ち帰かえりました。その後あとで、主人しゅじんは店みせのもの全部ぜんぶを集めて、事ことのしだいを告つげ、

「殿さまのお茶わんちやわんを造つくるように命めいぜられるなんて、こんな名譽めいよのことはない。おまえがたも精せいいっぱいに、これまでにない上じやうとう等とうな品物しなものを造つくってくれなければならない。軽かるい、薄手うすでのうすでがいいとお役人やくにんさまも申もうされたが、陶器とうきはそれがほんとうなんだ。」と、主人しゅじんは、いろいろのことを注ちゆうい意いしました。

それから幾いく日にちかかかつて、殿さまのお茶わんちやわんができあがりました。また、いつかのお役人やくにんが、店頭てんとうへきました。

「殿さまの茶わんちやわんは、まだできないか。」と、役人やくにんはいいました。

「今日にも、持つて上がろうと思つていたのでございます。たびたびお出かけを願つて、まことに恐縮の至りにぞんじます。」と、主人はいいました。

「さだめし、軽く、薄手にできたであろう。」と、役人はいいました。

「これでございます。」と、主人は、役人にお目にかきました。

それは、軽い、薄手の上等な茶わんでありました。茶わんの地は真つ白で、すきとおるようでございました。そして、それに殿さまの御紋がついていました。

「なるほど、これは上等の品だ。なかなかいい音がする。」と、お役人は、茶わんを掌の上に乗せて、つめではじいて見ていました。

「もう、これより軽い、薄手にはできないのでございます。」と、主人は、うやうやしく頭を下げて役人に申しました。

役人は、うなずいて、さつそく、その茶わんを御殿へ持参するように申しつけて帰られました。

主人は、羽織・はかまを着けて、茶わんをりっぱな箱の中に収めて、それをかかえて参上いたしました。

世間には、この町の有名な陶器店が、今度、殿さまのお茶わんを、念に念を入れて

造つたという評判が起こつたのであります。

お役人は、殿さまの前に、茶わんをささげて、持つてまいりました。

「これは、この国での有名な陶器師が、念に念を入れて造つた殿さまのお茶わんでございます。できるだけ軽く、薄手に造りました。お気に召すか、いかがでございますか。」と申しあげました。

殿さまは、茶わんを取りあげてごらんなさると、なるほど軽い、薄手の茶わんでございました。ちようど持つているかいないか、気のつかないほどでございます。

「茶わんの善悪は、なんできめるのだ。」と、殿さまは申されました。

「すべて陶器は、軽い、薄手のを貴びます。茶わんの重い、厚手のは、まことに品のないものでございます。」と、役人はお答えしました。

殿さまは、黙つてうなずかれました。そして、その日から、殿さまの食膳には、その茶わんが供えられたのであります。

殿さまは、忍耐強いお方でありましたから、苦しいこともけつして、口に出して申されませんでした。そして、一国をつかさどつていられる方でありましたから、すこしぐらいのことには驚きはなされませんでした。

今度、新しく、薄手の茶わんが上がつてからというものは、三度のお食事に殿さまは、いつも手を焼くような熱さを、顔にも出されずに我慢をなされました。

「いい陶器というものは、こんな苦しみを耐えなければ、愛玩ができないものか。」と、殿さまは疑われたこともあります。また、あるときは、

「いやそうでない。家来どもが、毎日、俺に苦痛を忘れてはならないという、忠義の心から熱さを耐えさせるのであろう。」と思われたこともあります

「いや、そうでない。みんなが俺を強いものだと思われているので、こんなことは問題としないのだろう。」と思われたこともあります。

けれど、殿さまは、毎日お食事のときに茶わんをごらんになると、なんとということなく、顔色が曇るのでございました。

あるとき、殿さまは山国を旅行なされました。その地方には、殿さまのお宿をするいい宿屋もありませんでしたから、百姓家にお泊まりなされました。

百姓は、お世辞のないかわりに、まことにしんせつでありました。殿さまはどんなにそれを心からお喜びなされたかしれません。いくらさしあげたいと思っても、山国の不便などころでありましたから、さしあげるものもありませんでしたけれど、殿さまは、百姓

の真心まごころをうれしく思われ、そして、みんなの食たべるものを喜よろこんでお食たべになりました。季節きせつは、もう秋あきの末すえで寒さむうございましたから、熱あついお汁しるが身体からだをあたたためて、たいへんうもうございましたが、茶ちやわんは厚あついから、けつして手てが焼やけるようなことがありませんでした。

殿とのさまは、このとき、ご自分じぶんの生せい活かつをなんという煩わづらわしいことかと思おもわれました。いくら軽かるくたつて、また薄うす手てであつたとて、茶ちやわんにたいした変かわりのあるはずがない。それを軽かるい薄うす手てが上じやう等とうなものとしてあり、それを使つかわなければならぬということは、なんといううるさいばかげたことかと思おもわれました。

殿とのさまは、百姓しやうのお膳ぜんに乗のせてある茶ちやわんを取りあげて、つくづくごらんになっていました。

「この茶ちやわんは、なんというものが造つくつたのだ。」と申もうされました。

百姓しやうは、まことに恐おそれ入いりました。じつに粗そ末まつな茶ちやわんでありましたから、殿とのさまに對たいしてご無ぶ礼れいをしたと、頭あたまを下さげておわびを申もうしあげました。

「まことに粗そ末まつな茶ちやわんをおつけもうしまして、申もうしわけはありません。いつであつたか、町まちへ出でましたときに、安やす物ものを買かつてまいりましたのでございます。このたび不ふ意いに殿とのさま

まにおいでを願つて、この上のない光榮にぞんじましたが、町まで出て茶わんを求めてきます暇がなかつたのでございます。」と、正直な百姓はいいました。

「なにをいうのだ、俺は、おまえたちのしんせつにしてくれるのを、このうえなくうれしく思っている。いまだかつて、こんな喜ばしく思つたことはない。毎日、俺は茶わんに苦しんでいた。そして、こんな調法ない茶わんを使つたことはない。それで、だれがこの茶わんを造つたかおまえが知つていたなら、ききたいと思つたのだ。」と、殿さまはいわれました。

「だれが造りましたかぞんじません。そんな品は、名もない職人が焼いたのでございます。もとより殿さまなどに、自分の焼いた茶わんがご使用されるなどということは、夢にも思わなかつたでございましょう。」と、百姓は恐れ入つて申しあげました。

「それは、そうであろうが、なかなか感心な人間だ。ほどよいほどに、茶わんを造っている。茶わんには、熱い茶や、汁を入れるというのをそのものは心得ている。だから、使うものが、こうして熱い茶や、汁を安心して食べる事ができる。たとえば、世間にくら名まえの聞こえた陶器師でも、そのしんせつな心がけがなかつたら、なんの役にもたたない。」と、殿さまは申されました。

殿さまは、旅行を終えて、また、御殿にお帰りなさいました。お役人らがうやうやしくお迎えもうしました。殿さまは、百姓の生活がいかに簡単で、のんきで、お世辞こそいわないが、しんせつであつたのが身にしみておられました、それをお忘れになることがありませんでした。

お食事のときになりました。すると、膳の上には、例の軽い、薄手の茶わんが乗っていました。それをごらんになると、たちまち殿さまの顔色は曇りました。また、今日から熱い思いをしなければならぬかと、思われたからであります。

ある日、殿さまは、有名な陶器師を御殿へお呼びになりました。陶器店の主人は、いつかお茶わんを造つて奉つたことがあつたので、おほめくださるのではないかと、内心喜びながら参上いたしますと、殿さまは、言葉静かに、

「おまえは、陶器を焼く名人であるが、いくら上手に焼いても、しんせつ心がないと、なんの役にもたたない。俺は、おまえの造つた茶わんで、毎日苦しい思いをしている。」と諭されました。

陶器師は、恐れ入つて御殿を下がりました。それから、その有名な陶器師は、厚手の茶わんを造る普通の職人になつたということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「殿《との》さまの茶《ちや》わん」となっています。

※初出時の表題は「殿様の茶碗」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

殿さまの茶わん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>